

通算 294 回 茅ヶ崎郷土会 史跡・文化財めぐり

横浜市中区

神奈川県立歴史博物館と

付近の博物館施設・中華街を訪ねて

日時 2019年7月3日(水)

集合 茅ヶ崎駅改札前 8時50分

行程 茅ヶ崎駅—桜木町駅—①県立歴史博物館—②横浜開港記念会館—③神奈川県庁本庁舎—④横浜開港資料館—⑤横浜税関—⑥中華街—関内駅 or 石川町駅

その他 県立博物館その他に入館料が必要です。

資料代として会員200円、会員外300円を集めます。



-連絡-山本俊雄 090-6174-2806 尾高忠昭 090-3241-0775 平野文明 090-8173-8845

会員募集中

(5~13頁は最終頁からご覧下さい)

① 県立歴史博物館 横浜市中区南仲通 5-60

昭和 42 年（1967）3 月に旧横濱正金銀行本店の建物を神奈川県が東京銀行より譲り受け、全国でも先駆的な都道府県立の総合博物館として開館した。初めは、人文系と自然科学系を合わせた博物館として活動していたが、平成 7 年（1995）に自然科学系が、生命の星地球博物館として小田原に分離独立、開館したことに伴い、横浜では「かながわの文化と歴史」をテーマに県立歴史博物館として再出発した。

一昨年の休館中に 50 周年を迎え、昨年 4 月末の再開館時には、「つなぐ、神奈川県博」のテーマのもと、最初の特別展を 51 周年記念企画と銘打って行っている。

特別展は年間 4 回ぐらい開催されている。

建物は旧横濱正金銀行本店本館の旧館部分が国の重要文化財であり、敷地を含めた旧館部分は国史跡となっている。また、屋上にドームを持つことから「横浜三塔」でなく、エースのドームを加えた「横浜四塔」として PR している。ドームの高さは約 36m。

展示は、常設展として、3 階のテーマ 1, 2 が古代から中世（鎌倉、室町時代）、その間の中央部分に奈良、平安時代と仏像、国宝円覚寺舍利殿の実寸大の再現展示模型、2 階がテーマ 3, 4, 5 で近世（江戸時代）、近現代（幕末のペリー来航前後から明治、昭和まで）と民俗、間の中央部分に焼き物（真葛焼）と横濱正金銀行関連が展示されている。1 階は普段は展示がなく、特別展示室となっている。

〈テーマごとの主な展示物〉

3 階は古代（テーマ 1）が、旧石器時代から縄文時代にかけての展示。人々は相模川の右左岸、特に左岸から境川に挟まれた相模野台地の縁辺部に数個単位の小集落を営んでいたをあらわす。石器、土器、茅山貝塚の環状集落、吉井貝塚の模型と縄文海進の地図、ジョウロ塚遺跡の顔面把手土器、三千年前に遡る弥生時代の進展地図、弥生時代の環濠集落模型、間口洞窟遺跡他の海蝕洞窟遺跡、須恵器土師器など。

奈良、平安時代では、相模国の古東海道、平塚の国府跡、高座郡衙跡と七堂伽藍跡。

海老名国分寺の模型、仏像と円覚寺舍利殿の実寸再現展示など。

中世（テーマ 2）は、鎌倉時代と後北条氏など東国の歴史と文化、鎌倉のジオラマから相模武士団の分布地図と山内首藤氏の変遷、天養記、三浦大介、頼朝、時頼の坐像、頼朝袖判下文、蒙古襲来絵詞、後北条氏五代の肖像画、山中城の模型、鎌倉五山、蘭溪道隆の頂相ほか、鎌倉新仏教、円覚寺仏殿の 1/10 の模型など。

2 階は江戸時代（テーマ 3）の旅から始まり、旅の携帯道具、東海道、甲州街道の分間延絵図、県内東海道の 9 宿場の浮世絵、稲葉氏と小田原城地図、小田原城天守閣木組み模型、箱根関所と取締り道具、鶴岡八幡宮寺の絵図、寺院の出開帳、東海道の浮世絵、相模の天領、旗本領の分布、手広の内海家の模型、新肴場と附浦 31 カ村。

中央（テーマ4）が青銅製カノン砲、真葛焼の高浮彫と釉下彩、横濱正金銀行関連、ゆかりの人々ほか、進出支店図など。

近現代は開港と近代化として、「鎖国」下の交流で日本誌や別段風説書、安政五カ国条約、開港後の外国人居留地のジオラマ、新橋横浜間の最初の蒸気機関車模型、4隻のペリー艦隊の模型、戊辰戦争時のしゃぐま（かぶり物）、神奈川県管内之図、自由民権運動と結社。

現代（テーマ5）の歴史と民俗は、関東大震災、昭和の生活と戦争、東京オリンピック。

民俗は武蔵小杉周辺の変遷3点からムラの儀礼、年中行事など。

② 横浜市開港記念会館 横浜市中区中本町 1-6

明治42年（1909）の開港50周年記念事業として計画され、大正6年（1917）に完成した。関東大震災による倒壊を経て昭和2年に復元されたが、ドームの復元は平成元年になった。同時に国の重要文化財となっている。「横浜三塔」の一つ「ジャックの塔」の愛称で知られる。塔の高さは約36m。

同場所には元々、福井藩の経営する生糸商「石川屋」があり、その店主の息子として岡倉天心がここで生まれている。明治になると藩も瓦解し、7年には横浜町会所が建設され時計台付きの塔で親しまれ、浮世絵にも描かれている。

③ 神奈川県庁本庁舎 横浜市中区日本大通 1

現在の本庁舎は4代目にあたり、昭和3年10月竣工。設計はコンペにより小尾嘉郎（一等賞）案を基に県建築部が実施設計をした。和洋折衷の屋上塔屋に展望台を持つ帝冠方式で知られている。帝冠方式の建物は国内では愛知県庁、名古屋市庁舎などに残るが、外国、特に中国東北部にはまだまだ見られるとのこと。展望台は「横浜三塔」の一つ「キングの塔」と言われている。高さは約49m。内部も見所が多く見学も可能である。

④ 横浜開港資料館 横浜市中区日本大通 3

昭和56年（1981）、元英国領事館に開館した。領事館は昭和6年（1931）に建築され昭和47年（1972）まで使われていた。中庭にある玉楠の木はペリー来航時の日米和親条約を見守った初代から数えて4代目になる。現在は1、2階に常設展、2階奥に特別展示室、その他保存資料約25万点を所蔵している。

⑤ 横浜税関 横浜市中区海岸通 1-1

安政6年（1859）横浜開港と同時に「神奈川運上所」として開設され、明治4年（1871）「横浜運上所」に改称、翌明治5年（1872）「横浜税関」に改称された。

大正12年（1923）の関東大震災で庁舎が倒壊焼失したが、帝都復興事業の一環として昭和9年（1934）に本関庁舎が完成した。緑青色のドームがシンボルで、現在も「クイーンズタワー」として親しまれている。高さは約51m。

（山本俊雄）

平凡社

日本歴史地名大系十四

『神奈川県名の地名』

る。
中華街 ④中区山下町

山下町のほぼ中央、外国人居留地の西地域の二三〇番から一六〇番にわたる本村通と加賀町に囲まれた区域にある。東・西・南の入口に朱塗りの大門がある。

幕末から明治初年には中国との条約が結ばれておらず、中国人は欧米商人の召使・使用人として来航した者が多く、なかには欧米商人の買弁として来航し、生糸などの商品の買付にあたった者もいたが、大部分は労務を提供する苦力であった(統通信全覧など)。開港当初は欧米商人の商館内に住込む者が多かったが、文久元年(一八六二)に横浜新田が埋立てられて居留地が拡張されると、新しい埋立地に居住する者が多くなり、市街地化された。初め南京町とよばれ、第二次世界大戦後は中華街とよばれて

いる。明治二年(一八六九)の男子人数一千二人、うち買弁商人級三六、家僕・工人級六三、夫子・無傭主者九〇三であった(「外務省記録」外交史料館蔵)。同一〇年には横浜在留中国人男子総数一千一四二人中、約五〇〇人が居留地内の当区域に集中居住している(神奈川県史料)。残りの約半数は他の居留地および領事館、外人商館内に住込んでいた。中国人の集団的居住は欧米人と言語・風俗・習慣・生活様式の相違によるものである。明治四年の日清修好条規締結後は横浜在留中国人の数はさらに増加し、登録者数だけでも、同二〇年代には約三千人弱、明治末には約四千人弱、大正時代には五千人を超えた(横浜市統計書)。広東省広州の出身者を中心に、上海・南京など中国南部海岸の出身者が多かった。中国人のほかに、インドやベトナムなどのアジア諸国民も少なくなかった。

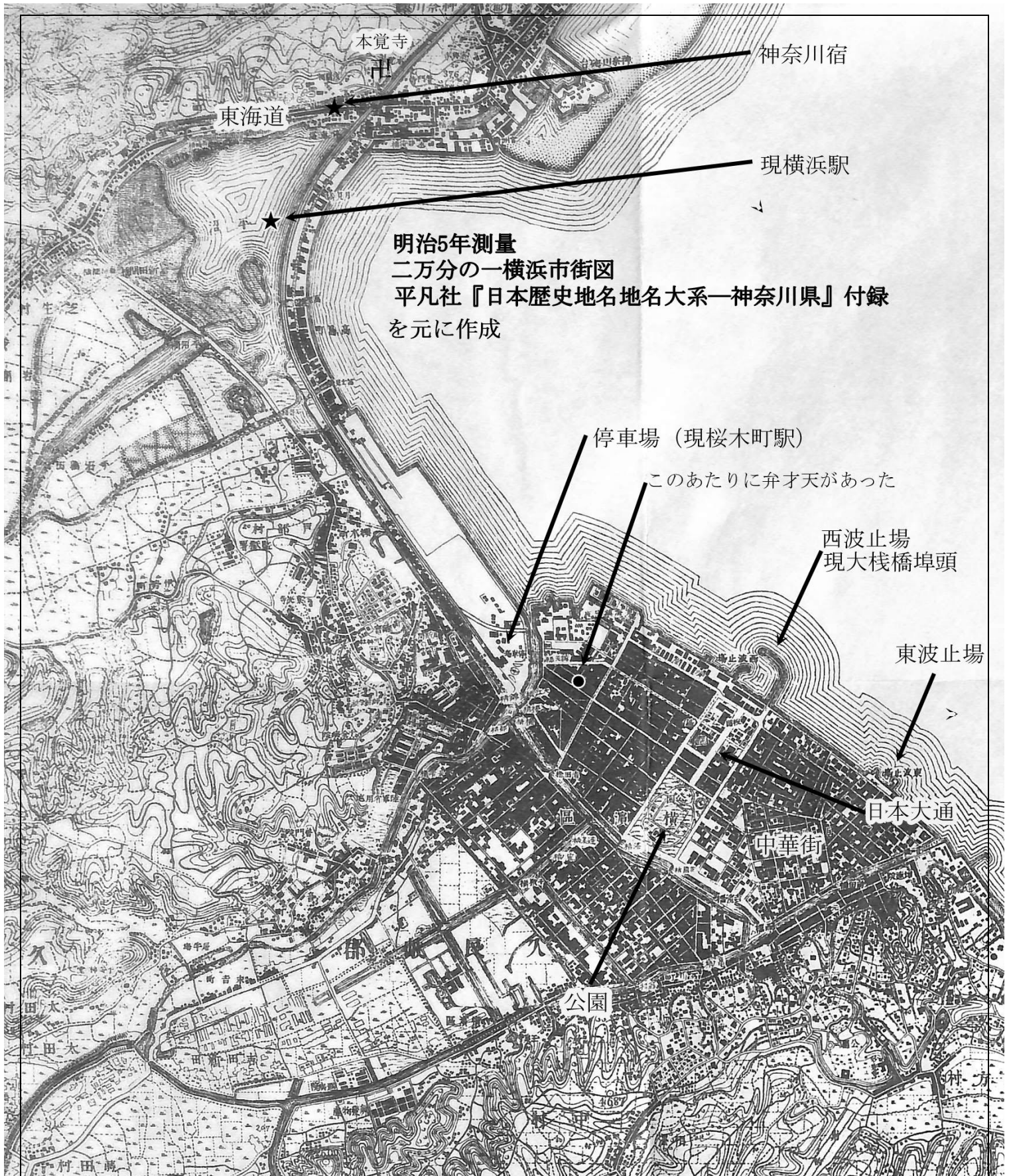
中国料理店が多くあり、日清戦争前までは会芳楼・遠芳楼などが有名であった。そのほかに家具・簾細工やその他の雑貨を扱う店、またペンキ塗・理髪師・洋服仕立などの職人も優れていた。中華街の中央に中国人の鎮守関帝廟がある。明治六年に建設された中華会館に「三国志」の武将関羽を祀ったことに始まる。会館は幕末に設置された清国人集会所の後身で、居留中国人の中核的存在となり、「衆志を連れ、衆事を商議するところとされ、関帝を奉祀してこの地に客たる華商の悉くが、その保護により恙なきを得た」(重建中華会館碑記)という。会館は関東大震災で焼失し、再建されたが第二次世界大戦の戦火にかかり、戦後再建された。正面に石彫の獅子一对を配し、白壁に朱柱の本堂には中央に関聖帝君、左側に地母娘娘、右側に観音菩薩を祀る。中華学院が隣接する。

元町 ④中区元町一―五丁目

東流する堀川を隔てて山下町に対し、東と南は山手町に接する。万延元年(一八六〇)三月一日に神奈川奉行堀利照らと各国領事との交渉で懸案となっていた横浜居留地設置が確定したことにより、居留地予定地内の住民が強

制移転させられて形成された町。すでに二月上旬に大家がなく移住に手数を要しないとみなされた村民に地所貸渡が命ぜられ(神奈川奉行并神奈川在勤目付伺書)幕末外国関係文書、二月二四日に住民は移転を承知した(横浜町役人総代請証文)同文書。代替地は元町と称した。横浜町名主見習半右衛門が名主となり、組頭五名、百姓代二名が置かれた。四月には居留地との間に堀川が開かれた。明治初期に関内の居留地が狭隘となり、山手地区に居留地が拡大されると、外国人を対象とした食料品・洋品・雑貨・家具などの日常生活必需品を扱う商人が多くなり、賑いをみせた。その影響が現在も受継がれ、欧米の流行品店が多い。

一丁目の高野山真言宗増徳院の下、通りに面して「色薬師」と称される薬師堂があり、毎月八日・一二日の縁日は市内・近在から参詣人が集まり、一―五丁目の道の両側に露店が立並び、横浜第一の縁日といわれたという(横浜繁昌記)。



本覚寺
出

神奈川宿

東海道

現横浜駅

明治5年測量
二万分の一横浜市街図
平凡社『日本歴史地名大系—神奈川県』付録
を元に作成

停車場（現桜木町駅）

このあたりに弁才天があった

西波止場
現大榎橋埠頭

東波止場

日本大通

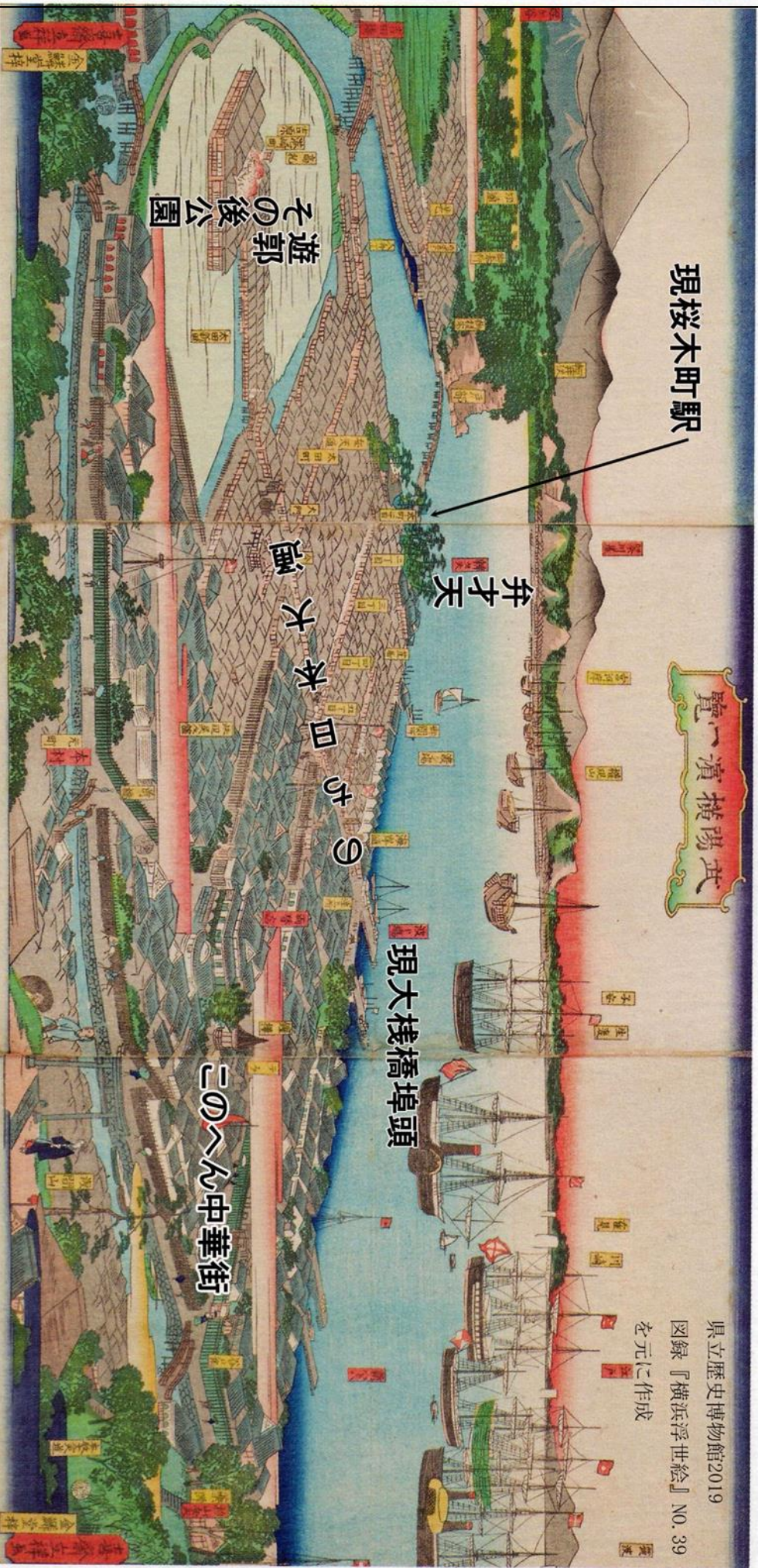
中華街

公園

現桜木町駅

武陽濱一覽

県立歴史博物館2019
図録『横浜浮世絵』NO. 39
を元に作成



弁才天

大田町

現大棧橋埠頭

このへん中華街

遊郭
その後公園

きな被害を受けた。さらに敗戦直後は、港湾施設・主要建築物などの多くが米軍に接収されるなどした。だが昭和二十七年ころより返還が始まり、まもなく神奈川県都としての管理機能が復活し、同三十一年九月一日政令指定都市となり現在に至っている。その後、戦争で大打撃を受けた貿易も、経済再建とともに復活し、工業地帯の整備・発展に伴って、横浜港は総輸出入で全国一の座を占め、さらに最近では東京のベッドタウンとしての開発が進み、港北ニュータウンやみなとみらい21など新たな都市づくりがめざされている。市内には横浜国立大学・横浜市立大学・神奈川大学などの大学が設立され、金沢文庫や横浜開港資料館などの文化施設、三溪(さんけい)園、山下公園、曹洞宗総本山総持寺などが市内外の多くの人々に親しまれている。面積四三・四・九三平方キ、人口三二二万〇六〇七人平成三年(一九九二)四月一日現在。 ↓神奈川(かながわ) ↓金沢(かなざわ) ↓戸塚(とつか) ↓保土ヶ谷(ほどがや)

【参考文献】『横浜市史稿』風俗編、『横浜市史』、『神奈川県史』、『横浜市企画調整局編』、『港町・横浜の都市形成史』、『横浜郷土教育研究会編』、『横浜の歴史』 (青木美智男)

平凡社

日本歴史地名大系十四

『神奈川県地名』

日本大通 にほんおどろ

海岸通から西南へ横浜公園にいたる通り。明治八年(一八七五)、外国人居留地のなかに三〇ヵ町を新設した際できた町名。横浜開港当初は駒形町こまがたといい、横浜の中心街であった。慶応二年(一八六六)の大火で運上所・町会所・神奈川奉行同心上番長屋・調役並定役住宅・通詞住宅などを全焼した。この大火を契機に外国人側は再び居留地の拡張・拡充を要求、同二年一月横浜居留地改造及競馬場墓地等約書が定められ、大規模な区画整理が行われた。港崎町みなとさきの遊郭を吉田新田村よしだにんげんに移転させて跡地を彼我公園とし、また延焼防止のため外国人居留地と日本人居住区の中央に海岸より公園まで歩道と街路樹を植えて下水を完備した。街路を設け、並行してつくる新両街路にも歩道を付けることになった。約書の実施は明治政府により計画が縮小され、中央車道一〇間、歩道・植樹地帯各五間の全幅二〇間の大通りが明治八年一月に完成し、日本大通と命名された。また約書では建物は屋根瓦のある煉瓦・石・厚い石灰壁造の建築物しか認められなかった。横浜での最初の近代的な街路であった。東側の居留地はイギリス・アメリカ・ロシアなどの外国公館敷地に

あてられ、西側の日本人地区も県庁・生糸検査所などの公館敷地となった。

吉川弘文館

『国史大辞典』十四卷

よこはま 横浜 神奈川県東部に位置し、東
 京湾に面する市。県庁所在地。国際貿易港、
 重工業都市であると同時に、首都圏の住宅都
 市。三浦半島の基部にあたる武蔵国久良岐郡
 にあって、半島状の砂州が横に長くのびた地
 形に村落が形成されたので、横浜といわれる
 ようになったという。室町時代の嘉吉二年(一

四四二)の市河季氏・比留間範数寄進状に横浜
 村の名がみえ、その存在を知ることができ
 が、戦国時代の『小田原衆所領役帳』にはそ
 の名はなく、石川村の一部に属していた。横
 浜の名が村として正式に確認できるのは江戸
 時代に入ってからである。慶安二(一六四九)
 三年に幕府が作成した『武蔵田園簿』には、
 代官間宮権三郎管轄の幕領、村高百三十七石
 一斗五升八合、このうち、田高四十六石余に
 対し、畑高九十石余もある、畑が村として
 登場する。そして、元禄十年(一六九七)の、
 いわゆる「地方(じかた)直し」の際、旗本荒
 川定昭の知行地となる。以後荒川氏の知行所
 として干拓がすすみ、吉田新田・横浜新田が
 開発された。また『元禄郷帳』では二百六十
 八石余、『天保郷帳』では三百四十一石余と村
 高を増大させ、天保元年(一八三〇)の『新編
 武蔵風土記稿』によれば、江戸へ陸路十里に
 あり、家数八十七戸、陸田が多く、住民は半
 農半漁の暮らしをしていた。嘉永六年(一八五
 三)の『武蔵国村数石高家数取調帳』によれば、
 家数が九十二軒に増えたものの、横浜新田を
 含めても百一軒にしからず、村内には雑木
 が生い繁り白昼でも狐がでるような寒村が一
 躍脚光をあびるようになったのは、翌安政元
 年(一八五四)、アメリカ東インド艦隊司令官
 ペリーが再来し、日米和親条約締結の応接所
 の地として横浜村が選ばれ、さらに安政五年
 六月に調印された日米修好通商条約において
 開港場とされた神奈川に港を建設する際、神
 奈川宿の一部として対岸の横浜村が港の建設
 地に選ばれたためである。そしてアメリカ総
 領事ハリスやイギリス総領事オールコックら
 の猛反対にもかかわらず、幕府がこの地に開
 港場の建設を強行し、安政六年六月二日(西暦
 一八五九年七月一日)開港にこぎつけ、名を横
 浜町と改めて、以後日本最大の貿易量を誇る
 とともに、外国文化の窓口となり国際色豊か

374頁-横浜 2

な文化都市として急速な成長を遂げたため
 ある。幕府外国奉行は安政六年三月、横浜村
 と隣接する戸部村を中心に、太田村・中村の
 一部や洲千湊・洲千湯を含めた地域を開港場
 として定め本格的な建設を開始し、突貫工事
 で開港予定日に間にあわせた。そして開港直
 後幕府の職制に正式に位置づけられた神奈川
 奉行(外国奉行兼帯)が管轄することになった。
 横浜町は、ほぼ中央部に建設された運上所を
 中心に、南東の外国人居留地と北西の日本人
 居住区からなる。また運上所から北の海岸に
 向けて、外国人の輸出入貨物を扱う東波止場
 と日本貨物を扱う西波止場が設けられた。こ
 のうち日本人居住区は五町に分かれ、そこに
 江戸をはじめ関東農村の各地から多数の商人
 が誘致された。彼らの多くは売込商と呼ばれ、
 外国人居留地で日本産品を売り込む役割を担
 った。町の行政は名主があたり、総元締めと
 して旧横浜村名主石川徳右衛門が、初代惣年
 寄を勤めた。貿易の開始と同時に移入人口が
 激増した。そのため安政六年には早くも開港
 場の拡大がはかられた。そこで旧横浜村など
 の住民を旧村内の山手に移し、万延元年(一八
 六〇)に横浜元町と称するようになったが、元
 町と居留地間に堀川を開鑿し、それに通ずる
 橋に関門を設け、関内(かない)と関外の境
 界とした。だが慶応二年(一八六六)の大火で
 日本人居住区の大半と外国人居留地の三分の
 二を焼失したため、大幅な都市再建策が実行
 に移され、現在の関内地区の原形が形成され
 た。その後も横浜の発展はめざましく、周辺
 の新田はつきつぎと都市化されるとともに沿
 岸の埋立てによる市街地の造成が進み、続々
 と新町の誕生をみた。この間横浜は、売込商
 のなから生糸貿易で多大な利益をあげる者
 が輩出し、外国商社や商人も続々と進出して
 くるなど、最大の貿易港としての位置を確固
 たるものにした。しかしその一方、尊王攘夷

運動の激化とともに外国人殺傷事件(夷人狩
 り)が続発し、欧米列強が居留地の駐兵権を主
 張するなど、幕末・維新期の経済・政治の激
 動のなかで、常に重要視されるようになった。
 こうして日米修好通商条約の開港場として名
 を揚げられた神奈川宿の一部として開発され
 た横浜には、明治元年(一八六八)に神奈川府
 が置かれ、同年神奈川県庁所在地となった。
 そして、以後、神奈川宿をのびる大都市に成
 長し、市街地はさらに拡大し明治十一年には
 郡区町村編制法により横浜区となり、戸数一
 万六九〇〇、人口五万五八七七人を数えるに
 至ったが、この間は横浜商人の商勢拡大期で、
 これらの経済力を背景に洋式水道の導入など
 国際都市化に向けての建設に着手し、明治二
 十二年四月一日市制を施行し横浜市となった。
 市制施行当時の市勢は、町数百三十八町(こ
 のうち外国人居留区五十六町)、面積五、四平方
 キロ、戸数二万七二〇九、人口二万一九八五
 人となっていた。その後、明治三十二年条約
 改正により外国人居留地が廃止され、同三十
 四年、第一次合併で久良岐郡戸太町・本牧
 村・根岸村・中村、橋樹(たちはな)郡神奈川
 町・保土ヶ谷町(一部)を編入し、さらに同四
 十四年の第二次合併、昭和二年(一九二七)の
 第三次合併によって市域は拡大の一途をたど
 った。それに拍車をかけたのが、明治五年の
 汐留(現新橋)―横浜(現桜木町)間の鉄道の開
 通をはじめとする、横浜電気鉄道(市電)・京
 浜電気鉄道(現京浜急行)・横浜鉄道(現JR横
 浜線)・東京横浜電気鉄道(現東横線)など
 の鉄道の開通であった。昭和二年十月一日に
 は区制がしかれた。その後、同十一年・十二
 年・十四年の第四・六次合併により周囲の町
 村を編入した。しかしこの間、大正十二年(一
 九三三)の関東大震災では膨大な数の死傷者
 を出した。また太平洋戦争における横浜空襲で
 は、市街地面積の四二%が被災するなど、大

武蔵国久良岐郡 元禄年中改定図



雄山間 大日本地誌大系
新編武蔵風土記稿 四卷

(南)

寄進 藥師堂

武州久良岐郡横濱村藥師堂免田畠等事、田大貳百文
畠二百文、任由緒依正□儀限永代寄進所也、然者任
由緒上者、後世之代官不可及是非候、爲後日仍執達
如件、

嘉吉二年辛酉卯月廿六日

比留間範政花押

市川季氏花押

石川寶金剛院

太神宮村の南にあり、○淺間社西の方にあり、○稻荷社同邊にあり、○第

六天社巽にあり、○駒形明神社乾の方にあり、以上増徳院の持
何れも見捨地に建り、

阿彌陀堂年貢地、村の北にあり、○觀音堂陸地二十歩、東南にあり、持前に同
じ、

じ、

辨天社地眺望圖



にて船かゝりよかりしが、次第に干潟となりしにより、若干の田地となれり、吉田新田に傳る古繪圖に此邊を宗閑湊と記し、且前に云正保中の郷帳に六石一斗五合秀閑寺領と見えたるに據は、此寺號によりて湊に名付しか、又地名を以て寺に名付しかにて有るべし、秀閑洲乾は相通にて何か假借ならん、因云秀閑寺今は廢せしか、又按に今村内辨天社領六石一斗餘にして、秀閑寺領と其數全同ければ、若くは辨天別當増徳院の舊號なるも知可らず、

辨天社

社地、一丁一段十五歩、洲乾の出洲にあり、土人清水辨天と呼ぶ、慶安二年社領六石一斗五合の御朱印

を賜へり、村の鎮守なり、社中には前立の像のみを置、神體は元祿中より別當増徳院境内假殿に安し、彼所にては杉山辨天と唱ふ、坐像長二尺程、弘法大師の作、此社地は海面に望勝景の地なれば、遊客神奈川驛より乗船して至る者多し、

別當増徳院村の東南の方にあり、社地を距こと十二三丁、境

龍山本泉寺と號、中興長覺正保二年二月二十日寂す、本尊不動、寺寶 般若心經一卷 紙

金泥なり、最古色に見ゆ、奥に明德三年二月二十三日左兵衛督源朝臣氏滿と記し、花押あり、羅漢像二

軸兆殿司の 五大尊像一軸弘法大師の筆なり、若宮權現社 天神

社 稻荷社以上元祿年中辨天 藥師堂 藥師は、聖德太子御社地より當所に引 歲四十二の時、作り

給ひし像なりと云、往昔は堂免の田畠もありしならん、嘉吉年中の寄進狀ありし由、本書は失て寫を藏せり、文は後に載す、其内に石川寶金剛院とあり、金剛院は石川寶生寺の院號なれば、當時は此堂彼寺にて進退せしも知べからず、

雄山閣 大日本地誌大系
新編武蔵風土記稿 四卷

元年の文書に見えなければ古き村名なり、此村郷名を傳へざれど、同寺應永二十一年及び文明十年の文書に、平子郷石川村と載、天文十四年の文書には本牧郷に繋たり、但平子は今此邊の庄名、本牧は領名に唱ふれど、當時は郷名なりしにや、民戸八十七、東北は海岸に傍ひ、西は洲乾の湊にて、南は中村・北方の二村に隣れり、東西十丁又は十七八丁の處もあり、南北も大抵十八丁程なり、水田少く陸田多し、爰も天水にて耕植す、正保中の改に御料所にて、外に六石一斗五合秀閑寺領と見ゆ、元祿十一年荒川丹後守に賜はり、今子孫荒川三郎兵衛が知行所なり、檢地は延寶二年八木仁兵衛糺せり、其餘海面に傍ひたる十六丁餘の地新墾せしを、文化九年大貫次右衛門檢地して高入とす、

高札場 中程にあり、

小名 濱田 清水辨天社邊より、本村水田のある所を云、【北條役帳】に十貫文久良岐郡濱田と見ゆ、此處な

るべし、北口村の北 原西の方 谷 東の方 馬場 南の方 を云、

内浦 西南 を云、

洲乾湊 村の西北なり、東西十二丁、南北四丁餘の入江にて、當村及戸部村吉田新田等にかゝれり、古はいと廣き所

○横濱村 横濱村は、郡の北にあり、江戸よりの行程庄名等は前村に同じ、以下並に同じ、昔は當村及中村・堀之内三村を合せて、石川村と唱へしを後に分村せしと云、【正保の國圖】等に既に三村を記せば、正保前に分村せしこと知へし、石川の村名は堀之内村寶生寺に藏する、康應

江戸名所図会から「横濱辨財天社」
(角川書店刊『新版江戸名所図会』上巻p590~591を元に作成)

横濱
辨財天社

この方南

上安房
総房

本牧

横濱

弁天

県立博物館はこの辺り

野毛村

姥嶋

この方北